(財)茨木市文化振興財団第59回公演

The 10th year
1996 — 2005

生れてはみたけれど

監督：小津安二郎

昭和7年(1932年)松竹蒲田作品／昭和7年度キネマ旬報ベストテン第1位／91分

澤登 翠の活動大写真

弁士：澤登 翠（さわと・みどり）

演奏：カラード・モノトーン

キートンの白人酋長

監督・主演：バスター・キートン

1921年米ファーストナショナル作品／21分

2005年

11/5【土】

15:00開演（14:30 開場）

茨木市市民総合センター
クリエイトセンター・センターホール

全席指定席　**1.500円**　均一料金　8月9日(火)窓口販売、電話予約とも8:45開始 ＊就学前のお子様はご遠慮ください。

■チケットの取り扱い・お問合せ
(財)茨木市文化振興財団　072－625－3055（クリエイトセンター1階 月～金、8:45～17:15、土・日・祝日休業）
＊電話予約もお受けしますが、お席はおまかせください。予約後は、1週間以内に財団事務局でご精算ください。
＊予約チケットの郵送をご希望の場合は、〈チケット料金＋郵送料290円〉を郵便局備え付けの「払込取扱票」でお振替ください。
手数料はご負担願います。〈振替口座〉00970－7－190576／加入者名：財団法人茨木市文化振興財団
＊当財団での窓口販売と電話予約が競合した場合は窓口販売を優先いたしますので予めご了承ください。

■その他の販売所
JA茨木市各店舗072-627-7762（本所総務課）／フミレコード阪急茨木市駅前店072-626-3723／朝日野村北摂販売（株）072-643-8424
電子チケットぴあ0570-02-9999・Pコード予約0570-02-9966（Pコード551-372）／ローソンチケット0570-06-3005（Lコード56485）

■主催：(財)茨木市文化振興財団　〒567-0888茨木市駅前四丁目6番16号 クリエイトセンター1階　http://www9.ocn.ne.jp/~ibabun/　■協力：茨木市民文化の会

澤登 翠（さわと・みどり）　活動弁士

東京都出身。法政大学文学部哲学科卒業。故松田春翠門下。日本を代表する弁士として国内はもとよりフランス、アメリカ他の海外公演を通じて“弁士”の存在をアピールし高い評価を得ている。「伝統話芸・活弁」の継承者として“活弁”を現代のエンターテイメントとして甦らせ文化庁芸術祭優秀賞他数々の賞を受賞している。適確な作品解釈による多彩な語り口でいままでに500本以上の様々なジャンルの無声映画の活弁を務めている。著書に「活動弁士　世界を駆ける」がある。（1973年デビュー）。

【受賞】日本映画ペンクラブ賞（1990年）、日本映画批評家大賞ゴールデン・グローリー賞（1995年）、第21回山路ふみ子文化財団特別賞（2000年）、
平成14年度文化庁芸術祭優秀賞（演芸部門）（2002年）

【その他】「夢みるように眠りたい」「二十世紀少年読本」（共に林海象監督）に出演。NHK BS2にて、数多くの作品が澤登の活弁入りで放送されている。
NHK「生活ほっとモーニング」青春の映画コーナーのインタビュアーとして2005年3月までレギュラー出演。

楽団　カラード・モノトーン

無声映画の音楽（生演奏）を担当する西洋楽器と和楽器とを混成した専属合奏団。‘87年、東京国際映画祭でD・W・グリフィス監督作品「国民の創生」の音楽制作、演奏を担当し好評を得て以来、日本独特の活動写真の音楽を地道に研究、澤登翠と共に各地で公演活動を行っている。
指揮：湯浅丈一　ピアノ：新垣 隆　ヴァイオリン：西野ゆか　フルート：鈴木真紀子　太鼓（パーカッション）：足立克巳

「生れてはみたけれど」 昭和7年（1932年）松竹蒲田作品／昭和7年度キネマ旬報ベストテン第1位／上映時間91分

説明：澤登 翠

【スタッフ】
原作：ジェームス・槇　脚色：伏見 晃　監督：小津安二郎　監督補助：清輔 彰・原 研吉　撮影・編集：茂原英朗　撮影補助：厚田雄春・入江政男　美術：河野鷹思

【配役】
父・吉井健之助：斎藤達雄　母・英子：吉川満子　長男・良一：菅原秀雄　次男・啓二：突貫小僧　重役・岩崎壮平：坂本 武　その夫人：早見照代　その長男・太郎：加藤清一
酒屋の小僧・新公：小藤田正一　悪童・亀吉：飯島善太郎　遊び仲間の子供：藤松正太郎・葉山正雄・佐藤三千雄・林 国康・野村秋生・石渡輝秋　先生：西村青児

【解説】
「子供たちが初めて出会った現実的な大人の世界」を小津安二郎監督が見事に描いた〈小市民映画〉の最高傑作であり、日本映画史上のベスト1と評する向きもある。細かい演技指導によって子供たちが皆、生き生きと見事な動きを見せており、ユーモラスな展開の中で、大人社会の矛盾を鋭くついた異色作。東急目蒲線が走る空地だらけの蒲田風景も懐かしい。小津監督が初めてキネマ旬報ベストテン第1位を獲得した作品でもある。

【あらすじ】
郊外に念願のマイホームを建てた吉井家の引越しである。今までガキ大将だった長男の良一と弟の啓二は、転校した学校の悪童亀吉やその仲間たちと喧嘩したり威張りあったりするうち、いつしか家来ができて、また大将の座を勝ち取るのだが、ある時、誰の父親が一番偉いかということになり、歯を入れたり出したりできる親父を威張る子や洋服をいっぱい持っていることを自慢する子、自動車があることを楯にとる子など各々が言い合った。だが、良一と啓二は、誰が何と言おうと自分たちのお父ちゃんが一番偉いんだと信じて疑わなかった。ある夜、重役の岩崎家で映写会があった。集まった社員の中に吉井もいた。重役の息子太郎と同じ小学校に通う良一たち仲間も一緒に重役が趣味で撮った映画を観ることになった。だが、良一と啓二がそこで見たものは、何と、日本一偉いと思っていた自分たちの父親が重役の前でペコペコ頭を下げてたり、物真似をして三枚目を演じご機嫌を取っている姿だったのである。父ちゃんは何故あんなみっともないことをするんだ、何故父ちゃんは太郎の父ちゃんより偉くないんだ、それでいて僕たちにばかり偉くなれって言って勝手すぎるじゃないか、大人になって太郎ちゃんに頭を下げなくちゃならないなら学校なんて止めちゃたって構わない……子供たちの投げかけにほとほと困り果てた父親は酒を飲み、泣きながら眠りについた子供たちの寝顔をじっと見つめるのだった。翌朝、良一と啓二はハンストに入った。だがしかし、疑問は何も解けぬままだが、子供は子供なりに、またご飯を食べて元気に学校へ通うしかないと解ったようだ。

【自作を語る　小津安二郎】
これは子供の写真を一つ撮ろうという気持ちから生れたのです。子供からはじまって大人に終わる話…。最初は割合明るいはずだったんだが、撮影中にはなしが変わって行っちゃってね。できたら大変暗くて、会社はこんな暗い話とは思わなかったと、完成してから2ヵ月ばかり封切を控えたくらいだった。それにこの写真で、僕ははじめて意識的にフェイド・イン、フェイド・アウトを使うのを止そうと思って、カットで終わらせてみた。このあとでも、たしかやっていないでしょう。大体O.LとかF.I、F.Oというのは映画の文法でもなんでもありゃしないんだ。あれはキャメラの属性なんだよ。

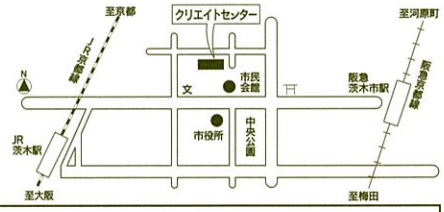
「キートンの白人酋長」　1921年米ファーストナショナル作品／上映時間21分

説明：澤登 翠

監督：バスター・キートン／エディ・クライン　　出演：バスター・キートン／ジョー・ロバーツ　他

【解説】
キートンは「物」と遊ぶのが好きである。「大列車追跡」の機関車、「蒸気船」の船、「セブン・チャンス」の石、そしてこの「白人酋長」では燃える炎が対象である。ほとんどの場合、キートンはそれらの「物」と同等である。この世の整然たる秩序、人間が物を支配するという公式を、キートンは見事に破っている。彼の映画では、むしろ「物」の方が大きな顔をして、小柄なキートンを睥睨するかのようである。この作品では、キートンは偶然の助けを借りて、恐ろしい火と対峙することになるのだが…。「対峙」というと固すぎるが、むしろ彼は無表情ながらも、喜々として、その火の傍らに立つのだ。こうした時に、彼の「ストーン・フェイス」と呼ばれた、無機質でいて、どこか憂鬱そうな表情がモノを言う。内心喜々として、だが表の顔は石の如くというこのアンバランスが、彼の喜劇に複雑な影を与えている。と共に、ある時彼は、見ているこちらの思い入れをはぐらかすような、あっけない、子供じみたギャグを繰り出す。キートン映画に、「不条理性」「哲学性」なるものを見出そうと待ち構えている凡庸な頭脳を一蹴する呆気なさで、幼児の悪戯をしてみせるのだ。このあたりが、キートンの底知れない魅力となっている。また、これはチャップリンやロイドもそうなのだが、キートンの場合も、自分の体躯の吹けば飛ぶような軽さを強調するために、大男、太り肉のごつい男を配しているのである。キートンには、ジョー・ロバーツという、長身で太った俳優が幾度も共演し、ある時は憎らしい鍛冶屋の親方に、またある時はキートンに財布を盗られる紳士に、そしてまたある時は先住民族の酋長に扮し、とぼけた味を出している。

【あらすじ】
蝶の収集家であるキートンが、先住民族の集落にやってくる。元来、先住民族の土地であるにも拘らず、石油が出ることに目をつけた白人の一隊が乗り込んで来て、酋長のもとへ立ち退き命令書をよこす。酋長は大いに怒り、これに同情したキートン、敢然と横暴な白人に立ち向かっていく。



(財)茨木市文化振興財団
〒567-0888茨木市駅前四丁目6番16号 クリエイトセンター1 階／TEL072-625-3055　FAX072-625-3036
クリエイトセンター（茨木市市民総合センター）JR茨木駅から東へ徒歩10分、阪急茨木市駅から西へ徒歩10分

住友大阪セメント株式会社・株式会社クボタ　特約販売店

株式会社 土方商店

代表取締役　土方正英

〒567-0811茨木市上泉町１番１５号　TEL072-627-1111(代)／FAX072-626-3431